

論題 より良い共生社会づくりを目指す，高校教育指導の在り方について
—学校，家庭，福祉の連携と生徒の主体性を伸長する自己肯定感との関連について—

社会福祉学専攻 佐藤 隆行

要 旨

日本の児童生徒の自己肯定感は諸外国に比べて低く，近年ではより著しく低下していることは「社会に開かれた教育課程」の下で，これからの時代に求められる資質・能力を十分に育めないことを文部科学省は危惧している．本研究では，研究者が長年勤務する高等学校生徒と保護者の自己肯定感の相関を調査し，養護教諭，スクールカウンセラー（以下，SC），スクールソーシャルワーカー（以下，SSW）の専門的見解を調査し，共生社会づくりのために高等学校（以下，高校）教育が実践すべき教育実践を見出した．生徒 25 人（不登校傾向 8 人含む）とその保護者を対象とし，質問紙調査及びインタビューを行った．養護教諭，SC，SSW を対象とし，インタビュー調査を行い，それぞれ半構造化分析，調査研究を行なった．調査結果から，良好な関係の親子は，「会話頻度が多く，生徒は能動的に話し，保護者は受容的に受け止めていること」「日常的な会話とともに，家庭内での手伝いの有無が親子間の信頼度を高めていること」についての相関が高かった．養護教諭，SC，SSW からは，家庭よりも学校内の人間関係に悩みを抱える生徒が多く，家庭の協力が大きいほど解決に向かいやすいこと」等の意見が出された．生徒と保護者の信頼関係と自己肯定感には，相関が見られた．これらの調査結果から，高校が実践すべき具体的教育実践は，「チーム学校」として家庭との連携強化による親子の会話頻度の高さと良好な親子関係の構築には相関があること，家庭内での「手伝い」をはじめ，学校内でのサービスラーニングの福祉教育実践の重要性と福祉教育実践，各家庭への定期的情報提供をすべきと示唆された．
キーワード：共生社会づくり，自己肯定感，福祉教育実践